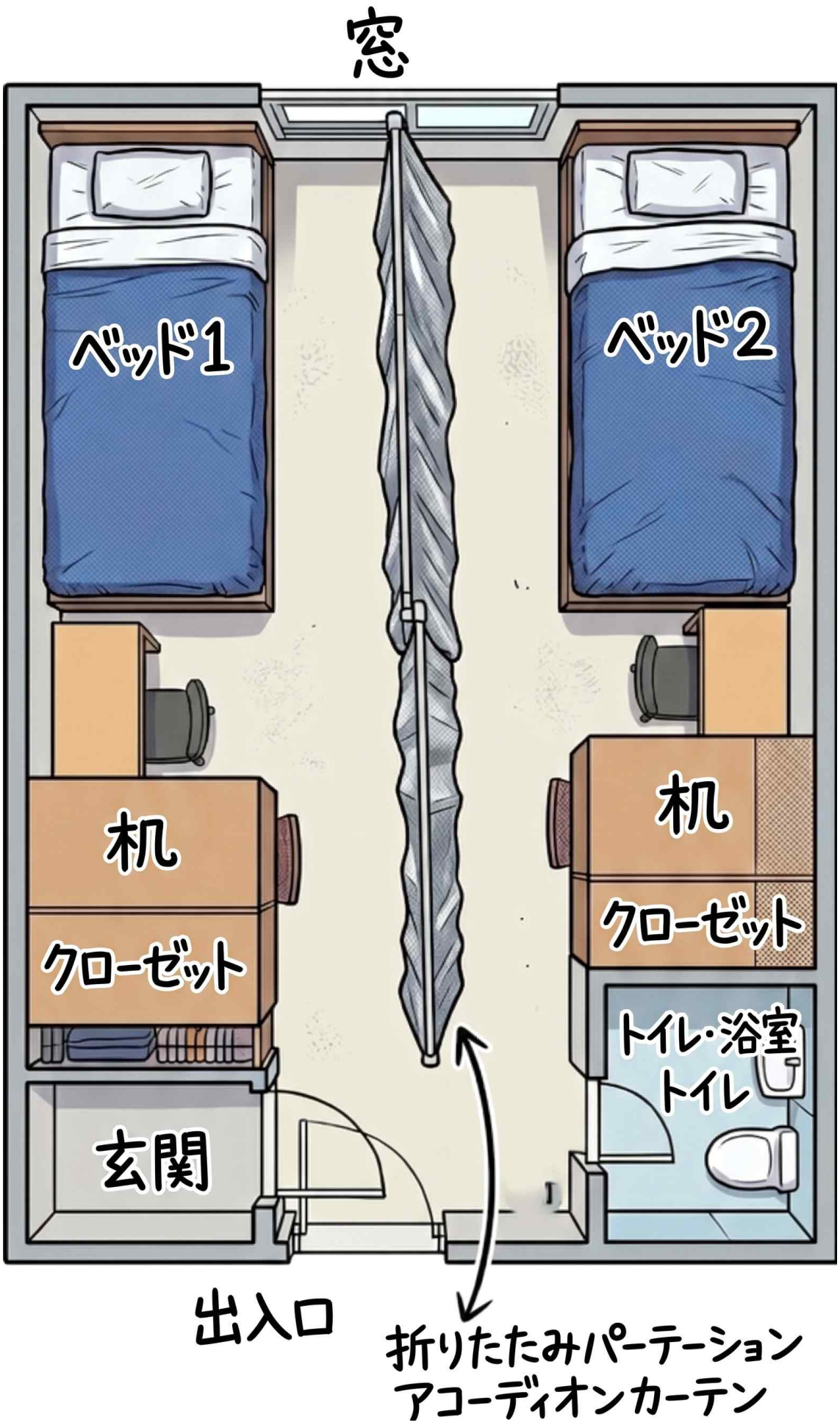



窓
ベッド1
ベッド2
机
クローゼット
机
クローゼット
トイレ・浴室
トイレ
玄関
出入口
折りたたみパーテーション
アコーディオンカーテン

【2015年4月4日。土曜日。昼。328号室】- ユ・プルム

奇跡のような静寂だった。昨晩から約束されていた平和である。

普段ならこの時間でも、専門書をめくる神経質な紙の音や、ほのかだが確実に存在を主張するヨン・ムンギョン特有の香水の匂いが、部屋の空気をいくらか占有していたはずだ。しかし金曜の夜、ムンギョンは実家に帰ると言って荷物をまとめて出て行った。

ヨン・ムンギョンのいない328号室は、もはや戦場ではなかった。ただユ・プルム、彼女のためだけに完全に明け渡された完璧なオアシスだった。

プルムは久々にアラームさえ切り、だらだらと寝坊を貪った。目を覚ました時、自分を監視するような冷たい視線も、パーテーション越しから聞こえてくる規則的な寝息もないという事実が、非現実的な解放感を与えてくれた。同居している間は、週末だろうと完全に気を抜くことはできなかったのだ。

しかし、今日だけは違った。ボサボサの髪を適当にかき揚げて起き上がった彼女は、鼻歌を歌いながらユーヒーを淹れた。自分で挽いた濃い豆の香りが部屋にこびりついた緊張感を洗い流していく中、プルムはイヤホンを耳に押し込んだ。ボリュームを普段より二段階上げると、インディーズバンドのベースの旋律が鼓膜を心地よく打ち据えた。誰の顔色も窺うことなく、リズムに乗りながらユーヒーをすする土曜の午前。ロースクール入学後、初めて味わう完全無防備状態の週末だった。

午後が近づくにつれ、すっかり春めいた陽気を肌で感じたくなったプルムは、薄手のパーカーだけを羽織って大学の正門前へと向かった。キャンパスの至る所で桜が咲き誇る準備をしていたが、彼女の目的地は花見ではなくカフェだった。

サンドイッチを買って帰る道すがら、背中に当たる日差しがやけに暖かかった。部屋に戻ったプルムはサンドイッチを平らげると、そのままベッドにダイブした。出かけている間にたっぷりと日光を吸い込んだ布団からは、カサカサという音とともに香ばしい日向の匂いがフワッと立ち上った。

「あぁ……生き返るわ」

プルムはうつ伏せのままスマホを開き、習慣のように読んでいるロマンスウェブ漫画をスクロールし始めた。中間テストの準備は来週から始める予定だった。今日みたいな日は、この甘美な休息を逃すわけにはいかない。長い受験生活において、休息もまた勉強の一部なのだ。しばらくスクロールしていくと、画面の中の男女の主人公が、互いの息が届きそうな距離で見つめ合って立ち止まった。そして続く濃厚なキスシーン。赤く染まった画面の中の主人公たちの描写が、今日に限ってやけにエロティックに感じられた。

瞬間、プルムの心拍数が不規則に跳ね上がった。スマホを持っていない左手が、反射的に自身の胸の辺りへと這い上がる。

思えば、ロースクールに入学してからのここ数週間は、極度の『感覚の冬眠』期間だった。見知らぬ環境に適応しなければならないというプレッシャー、そして何より、犬猿の仲であるヨン・ムンギョンと同じ空間を使わねばならないという極限の緊張状態が、彼女のすべての原初的な感覚を麻痺させていたのだ。性欲が入り込む隙など微塵もなかった。それは贅沢であり、ライバルの前で見せてはならない致命的な隙だと、本能的に抑え込んでいたのである。いつか大学時代、男子の同期が「軍隊の訓練所期間中は性欲が湧く隙なんてない」と話していたのをケラケラ笑って聞き流していたが、いざ自分がこんな状況を経験してみると、あれは冗談じゃなかったんだなと思い知らされた。

しかし、彼女はまだ28歳になったばかりの、肉体的に最も性欲が旺盛な時期の女だった。国家試験の勉強という長いトンネルの中で、孤独に自分を慰める術は身につけていたが、ロースクール入学後の極度のストレスと、3週間前にムンギョンと繰り広げたあの泥沼の肉弾戦（キャットファイト）は、眠っていた本能の信管を確実に刺激していた。憎悪を剥き出しにして取っ組み合った時に感じた、ムンギョンの熱く濡れそぼった肌、髪を掴み合った隙間から伝わってくる荒々しい吐息……そして、もつれ合った拍子に互いの最も敏感な秘部同士が（貝合わせのように）生々しく擦れ合ったあの感触。嫌悪感で振り払ったはずのあの残像が、今や強烈な渇きとなって全身を駆け巡っていた。

『よりによって、なんであの女の顔が浮かぶのよ……』

ヨン・ムンギョンはいない。この部屋には私だけだ。

プルムはベッドの上でゆっくりと横向きに寝転がった。固く閉ざされたドアと、静まり返った廊下がもたらす安心感が、彼女の大胆さを煽り立てる。すでにスマホは手放していた。

彼女の手が、ダボついたTシャツの下、滑らかな素肌の上へと滑り込む。薄いブラジャーの上から手のひらを這わせると、すでにツンと硬く存在を主張している乳首の感覚が、掌を伝って脳髄へと直行した。

「はぁっ……」

プルムの唇から熱い嬌声が漏れた。指先が微かに震えながらブラジャーのカップの内側へと深く入り込み、敏感な先端を捏ね回す。ビリビリとした快感が脊髄を伝って下り、下腹部をズンと重く濡らしていった。躊躇する時間は長くなかった。プルムの手は真っ直ぐに下へと向かう。ショートパンツのゴムを引っ張って隙間を作り、指を這わせる。ショーツと下腹部の間の狭い隙間を抜け、最も秘められた、すでにグショグショに濡れそぼっているその場所へと、指先が滑り込むように沈み込んでいった。

平和だった土曜の静寂は、今やプルムの熱を帯びた荒い喘ぎ声と、ベッドフレームの微かな軋み音で満たされようとしていた。

【2015年4月5日。日曜日。午後。列車内、328号室】- ヨン・ムンギョン

ガタゴトと揺れる列車の振動が、足の裏を伝って全身に心地よく広がっていく。車窓を流れる景色は、ソウルの摩天楼を抜け出し、次第に低くのどかな稜線へと変わっていった。山の裾野ごとに薄桃色のツツジや黄色いレンギョウが恥ずかしげに顔を覗かせており、まさに春爛漫だった。

ムンギョンはイヤホン越しに流れる気怠いアコースティックの旋律に身を委ねた。昨日と今日、実家で過ごした時間は暖かかった。両親は前回の国家試験の不合格について、一言の叱責もしなかった。むしろ、実家からの絶大なサポートなしでも名門大の法学部を出てロースクールに進学した娘を、いまだに一族の誇りとして扱い、傷ついたプライドを丁寧に撫でてくれた。『賢くて大切な自慢の娘』。その信頼に満ちた眼差しに応えたいという決意を固めるほど、ムンギョンは自身の襟をさらに正した。学校に戻る道中だったが、咲き乱れる春の花々のせいか、まるで地方へ短い小旅行に出かけているかのような錯覚に陥り、心がすっかり解きほぐされていた。

だが、列車が寮の最寄り駅に近づくにつれ、平穏だった心に微細な亀裂が生じ始めた。328号室。あの狭い領土を共有する『不愉快な侵入者』の存在が、再び脳裏を侵食し始めたからだ。

寮の建物に到着し、廊下を歩いていた時のことだ。328号室のドアが開き、ユ・プルムが外に出てくるところだった。3週間前のあの凄絶な泥沼の乱闘（キャットファイト）以来、二人の間にはいまだに異様な気まずさが漂っていた。

「……帰ってたの？」

プルムが先に短く投げかけた挨拶には、明らかなぎこちなさが滲んでいた。ムンギョンもまた、表情を変えることなく小さく頷くことで返事に代えた。必要最低限の事務的な会話以外は交わさないということが、現在の彼女たちの関係を物語っていた。その時、プルムの後ろから、夕食の約束でもしていたらしい女子の同期が顔を出し、ムンギョンに声をかけた。

「あ、ムンギョンさん！　ちょうどよかった。私たち、今日プルムさんと夕食食べる予定なんですけど、ムンギョンさんも一緒に行きません？ 学校の前に新しくできたパスタ屋さんで」

「あ……お誘いありがとうございます。でも、列車に長く乗ってたせいか少し疲れてしまって。今日はゆっくり休みたいと思います。楽しんできてくださいね」

ムンギョンは特有の優雅な微笑みを浮かべ、婉曲に断った。プルムと同じテーブルに座って嘘くさい愛想笑いを振り撒くなど、今の穏やかな気分を台無しにしたくなかったのだ。同期たちが廊下の奥へと消えていくのを確認してから、ムンギョンは部屋の中に入り、内鍵をかけた。

ガチャリ。

ロックが回る音と共に、ピンと張り詰めていた緊張の糸がプツリと切れた。ムンギョンは窓を開けて換気をし、軽くシャワーを浴びてベッドに身を横たえた。プルムのいない328号室は、この上なく静かで居心地が良かった。

天井を見つめて寝転がっていると、昼間に見た春の花々の残像が目の前にチラついた。天気が良すぎたせいだろうか、それとも実家で感じた安堵感のせいだろうか。緊張が緩んだ隙を突き、抑圧されていた生理的な欲求がスルリと鎌首をもたげた。

28歳。清純で高潔な『ヨン・ムンギョン』というイメージの裏に隠された、一人のメスとしての本能が最も激しく煮えたぎる年齢だった。世のすべての男たちが彼女の真っ白な肌と淑やかな微笑みに幻想を抱く中、当のムンギョンは国家試験の勉強という孤立した生活の中で、自らを慰める行為にすっかり慣れきっていた。オナニーは彼女にとって、過酷なストレスを排出する最も効率的な手段であり、誰にも知られてはならない甘美な秘密だった。

しかし、今日は少し気分が違った。いつものように単に溜まった性欲を処理したいという衝動を超え、3週間前にプルムと繰り広げた、あの汗と快楽に塗れた泥沼の肉弾戦（キャットファイト）の記憶が、何度も何度も脳裏をよぎり邪魔をしてくるのだ。

『……あり得ない。なんで私、あのクソアマのことなんか……っ』

最後に互いの熱い吐息を浴びながら交わした、あの気まずい視線。酒の酔いと肉体的な摩擦による不可抗力の興奮だったと自分を納得させてはいたが、理性的なムンギョンの頭では到底受け入れがたい汚点だった。だが、否定すればするほど、あの時もつれ合ったプルムの手の感触や、引き締まった太ももの弾力、そして何より、互いの最も淫らな秘部同士が（貝合わせのように）生々しく擦れ合ったあの記憶が、さらに鮮烈に身体のあちこちに刻まれた感覚を呼び覚ました。

ムンギョンは自嘲気味に笑いながら、自身のダボついたTシャツの上に手を乗せた。プルムは出かけており、少なくとも数時間は、この部屋の主は自分ただ一人だ。

彼女の細い指先がTシャツの下へと潜り込み、豊満な乳房全体を優しく鷲掴みにした。ひんやりとした指先が触れた瞬間、脊髄を突き抜けるようなゾクゾクとした電撃が走った。

「んあっ……」

ムンギョンはギュッと目を閉じた。清純な女神という仮面をかなぐり捨てた彼女の喘ぎ声が、少しずつ荒く熱を帯びていく。彼女の手は躊躇うことなく下へと下り、綿のショーツの薄い布の上から、自身の最も敏感な場所を探り当てた。指先でクリトリスの位置を確かめ、じっくりと押し潰すように圧をかけると、ドロドロとした熱い快感が足の指先まで突き抜けていった。